

# イチキ大工通信

NO.10

お問合せ

mobile:080 (1059) 1426

mail:info@ichiki-daiku.com

いよいよ土壁を塗るための工事が始まりました！

土壁の下地である小舞（こまい）搔きが仕上がってきています。小舞は、骨となる間渡し竹（女竹：めだけ）を柱と梁に少し穴を空け、はめ込み、それに、割竹（真竹：まだけ）を横縦に編んでいきます。竹を編むには、藁（わら）の縄を使って編んでいくのですが、この編んでいく作業は職人技ともいえる作業です。何本も竹を束にして片手に持ち、その手ともう片方の手を使ってスピーディーに編んでいきます。

そして組まれた小舞は間から光が入り、とても美しい光景が広がります。残念ながらこのままでは壁の耐力がないので、すべて上から土壁を塗ってしまいます。

ちなみに、数寄屋（すきや）造りのような建築で、茶室の下地窓といって壁とは別に小舞を編み、わざと小舞を見せる場合もあります。壁を塗らずに残しておきたいほど美しい小舞は、小舞搔きが終わる今しか見られません。一生のうちで皆さんが身近で目にできる機会は少ないと思いますので、お時間のある時に、見に来てくださいね！



左上：間渡しの竹（女竹：めだけ）を取り付けるための墨付けをします。

右上：墨付け後、キリで穴を空け、間渡しの丸竹を差し込みます。



左下：小舞を編むための縄（小舞縄）です。稲刈り後の茎を乾燥させてできるものですが、最近では稲刈りの機械化により、なかなか取れにくい物になっています。また、強度を出す為、麻紐も中に編まれています。

右下：「左官 吉田」の吉田さんは、竹を横から搔き、その後縦に搔いていきます。何本も束に持ってスピーディーに編んでいく様子は見事な職人技です。



仕上がった小舞から優しく光が入り、とても美しいです。見とれてしまいます！



縄がきれいに編まれています。現場へ来た際にはぜひ近くで見てほしい！